

高野史男著

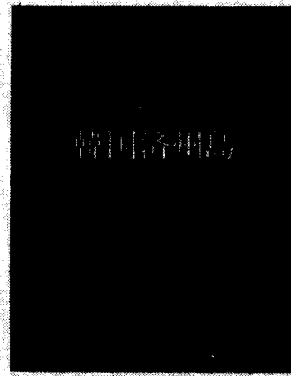
「韓国 濟州島」

日韓をむすぶ東シナ海の要石

一九九六年一〇月二五日発行

中央公論社（中公新書）

二〇七ページ



濟州島は、近頃、観光の島として知られるようになった。にもかかわらず、島の風土・歴史・生活・産業などについてまとめて書いた本が出ていない。単に観光だけでなく、その土地をさまざまな角度から見たいと思う人にとって、まことにうってつけの本である。中公新書という形で出ているので、多くの人の目にもとまっている。

高野史男教授は、立正大学文学部地理学科の前教授で、在任中に地理学科のスタッフや大学院生、それに地理学科卒業生でソウルにある建国大学の洪始煥教授らの協力を得て、日韓合同の濟州島學術調査団を組織し、一九八四年から八七年にかけて、合計六回の地域実態調査を行った。その報告書は『韓国濟州島の地域研究』として八八年に出されている。この報告書を基にして、新しい情報を加えて本書がつくられた。

本書は高野史男（歴史・海女漁業）、高村弘毅（風土）、澤田裕之（農牧業）、大塚昌利（工業・観光）、鈴木厚志（都市）の五人の共同執筆であるが、高野教授が全体を増補修正してまとめ直したものである。これを読むことによって、濟州島の地誌が分かるだけでなく、韓国全体のこと、また日韓関係についても、たいへんに役に立つ知識が得られる。

濟州島の地理的研究を日本人として初めて本格的に行ったのは、故榎田一二博士（地理学科元教授）であった。先生は一九三〇年から三八年にわたって、のべ二〇〇日以上にも及ぶフィールドワークをし、この島のさまざまな姿を学問的に調査した。当時の濟州島の実態を学問的に知るこ

とのできる唯一の研究ともいわれており、他分野だけでない、韓国でもきわめて高く評価されている。高野教授らの今回の研究のまとめは、この榎田先生の業績に触発されたものであると同時に、最近の済州島の姿を、より新しい方法でまとめたものといえよう。

韓国の一般的な風土と違って、済州島は巨大なアスピーテ火山島である。たくさんの世界最大級の溶岩洞があるだけだけでなく、大陸的な牧野がひろがっている。その昔、高麗軍と倭寇軍が全羅道で激突し、勝った高麗軍は一六〇〇頭もの馬を捕獲したといわれるが、このようなたくさんの馬の飼育は、その前に元朝の直轄領となっていた済州島が供給地だったろうと高野教授は見ている。いずれにせよ、歴史の中でも済州島は重要な位置を占めている。

大陸性の風土の韓国の中で、この島は温州ミカンがとれることで有名である。「南国的」な海岸と雄大な火山は、韓国人にとってたいへんな魅力で、観光産業がよく発達している。トルハルバンの石像が似合う伝統的な草屋根の民家は、もう民俗村でしか見られないほどに減ってしまった一方、道都の済州市は国立大学のある近代都市へと変容している。工場が少ないので空気はよい。一面にキキョウ

(トラジ)の花が咲く畑の横を黄色い牛が群をなして歩いている。巨大なリゾートからは、海も山も見られる。著者がいうように、済州島は「地理の実験室」なのである。

(正井 泰夫)